

2010年9月に加古川市であったアマチュアボクシング大会。初の公式戦で、竹中佳30は判定負けを喫した。当時の竹中はフライ級(48・99ポンド、超50・80ポンド)は超57・15ポンドに近かった。4階級の体格差があり、押し込まれた末の結果だった。

試合後、高砂ボクシングジムへ戻り、片付けを終えた竹中。大粒の涙が頬を伝った。ジムの会長の山下忠則50が理由を問うと竹中は「悔しい」と一言、返した。

竹中は同年4月、ジムに入門していた。女子ボクシングに懐疑的だった山下は「どうせすぐ辞めるやろ」と見て、細かな技術的な指導をしていなかった。だが、試合後の負けず嫌いな態度が山下を動かした。「泣くくらいボクシングのことを考えるなら、練習を見ようか」。世界戦へ続く道の第一歩だった。

竹中は加古川市立志方

ボクシングが好きだから 世界中選手・20日世界戦

技術を学びのめり込む

原点

中時代、テレビ番組を見ながらボクシングをし、好きな「面白さ」とボクシングの時にサンドバッグをたたきに憧れた。加古川西高。1年に満たない経歴時代はバレーボールに打ち込んだが、心に刻まれた。武庫川女大1年の秋、神戸市垂水区のシムを志願したボクシング。アマチュアライセンスをムで念願だったボクシングが踊るラフでの催してグクローブを両手にはめた。思うままにシャドーキックボクシングに出場



したことも。大学卒業後にフィットネスジムへ就職したが、憧れは消えず、2年で会社を辞め、攻防に兼備のボクサー育成で知られる高砂ジムに通い始めた。半年後、カウンターの打ち方や体の動かし方などの技術を学び始めた。力を抜いて打ち合うマックスボクシングやスパarringも初めての経験だった。「頭脳を使いながら体を動かすのって面白い」。スポーツ全般に明るい竹中が、奥深さを知り、のめり込んでいった。

「辞めたいと思ったとは一度もない」と言い切る。ただ「だから続ける気もない」ともいう。世界戦へ調整を進める竹中佳選手。強い気持ちを持ってベルトを取りたいと必勝を誓う高砂市中筋5、高砂ボクシングジム

世界ボクシング機構(WBO)女子ライトフライ級王座決定戦が20日、三田市の駒ヶ谷体育館で行われる。30歳の竹中にとって、2014年に獲得した東洋太平洋のベルトを返上して臨む大一番になる。なかなか脚光の当たらない女子ボクシングに、ここまでのめり込むのはなぜか。世界戦を前に、ボクサーとしての歩みを振り返るとともに、日々の暮らしや勝負に懸ける思いを探った。(敬称略)

(小林隆宏)